

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (12)

—— А.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае —— を中心として

滝 本 可 紀*

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (12)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

Cherepanov returned to Canton with V.K. Blyukher, who was to resume the post of chief military adviser there. When he arrived in Canton, he attempted to understand the meaning of the Events of March 20.

On 18 March navy commissar Li Zhilung, a communist, acting commander of the naval forces, received a telephone order in Chiang Kai-shek's name to move the Zhong-shan cruiser to the island where the Whampoa School was situated. Li Zhilung acted correspondingly but requested a written confirmation of the order. Then he received the answer that "no such order had been given."

Chiang Kai-shek saw that at the time Canton was helpless against its many enemies without the Communist Party of China and Soviet assistance.

Besides, he realized that a considerable number of the generals had no desire to help him gain personal power.

How did relation develop between the CPC and Guomingdang after the Events of March 20? CPC organization was not mobilized in time actively to resist the offensive by any relevant measures and failed to show serious tactical skill.

中国に於いて軍事顧問としての役割を果し終えたチェレパノフはソ連への帰国途中、北京に到着した時、またもやボロジンと共にモンゴル、ウラジオストク経由で広東に戻るようになった。彼は馮玉祥の国民軍と関った後、北京で中山艦事件の報告を聞き、二年間行動を共にした蒋介石の今回の事件を知ったが、これは全く予期しないものであった。

彼は広州に戻ると、精力的に中山艦事件の真相をつきとめ、またそれが持つ意義を知ろうとした。

国民党と共産党は統一戦線を形成していたが、共産

党の勢力は国民党の内外で大きくなって行った。国共合作以来、共産党の李大釗、譚平山、于樹徳が中央執行委員になり、また国民党の組織部長、農民部長等、党の重要なポストを握った。民族の独立を中心にまとまっていた国民党はその中に、種々の分派を包含しており、共産党との統一に反対するグループがあった。彼らはこれを見て、共産党に対し反撃を始めた。

孫文の死後、廖仲愷の暗殺が胡漢民一派によって行われると、蒋介石は左派側に立ち、右派の大物、胡漢民、許崇智を追放した。しかし、右派はまたもや北京の西山碧雲寺に集まり、広東の左派に対抗した。1926年1月、広東で国民党二全大会が開かれ、国民党左派と共産党の進出には著しいものがあつた。

平成3年9月28日受理

* 一般科

蒋介石はこの大会で初めて中央執行委員に選ばれた。その上、彼は黄埔軍官学校の校長や軍関係の指導者として重きをなしていたため、軍の実権を握るようになってきた。この時から、彼は従来とは異なり左派に近づくのを止め、左派や共産党から独立し、むしろその鎮圧に向かうようになった。この最初の現われが中山艦事件である。

蒋介石はこの事件後、国民党左派や共産党、コミンテルンを追放しようとしたが、それによって自分自身が孤立し、中国の他の軍閥や帝国主義者に打倒されると感じ、すぐに和解し、全力をあげて北伐に着手することになる。そして北伐の成功の途中でクーデターを起こし、国共合作に終止符を打つことになった。

チェルバーノフは中国共産党の陳独秀が蒋介石の意図を見抜けず、結局蔣のクーデターを成功させてしまったと考えた。

以下は国民党軍事顧問であった А.И. Черепанов の回想録《Записки Военного Советника в Китае》1976, НАУКА の 374 頁～416 頁の全訳であり、これに関して、中国人民大学蔣春雨教授に多くの教示を受けたことを記し、ここに厚く御礼を申し上げる。

《中山艦事件》に関する二、三の新事実

当然のことであるが、私は広州に着くとまず、《中山艦事件》の意味をよく考えてみようとした。目撃者全員にあたって詳しく質問したり、関係資料を調べてみた。かくて、事件の全貌が徐々に、ある程度解ってきた。

《中山艦事件》は学術論文や回想録の中で、長年に渡って解明されてきたけれども、私もまたこの事件に関しいくつかの興味深い詳細を、読者に提供できであろうと期待している。

蒋介石は確かにヒステリーの性格の持ち主ではあったが、この事件は決して突然の、衝動的な行動ではなかった。この陰謀は十分に熟考されたものではなかったが、長い間準備されつつあった。早くも 1926 年、3 月 9 日、蒋介石は自分の所で会議を開いた。国民革命軍第 1 軍の指揮官達がそれに出席した。まさにここで行動の決定がなされた。出席者達は自分の可能性をとて過大評価し、第 4、5 軍及び第 3 軍の一部が彼らの側に立つてであろうと予想した。しかし、この予想が的中しなかった事を我々は知る事となる。

海軍の政治委員である共産党員李之龍は当時、海軍

局局長代理であった。3 月 18 日、彼は黄埔軍校のある島へ巡洋艦《中山号》を回航するようという電話による蒋介石名の命令を受けた。李之龍は文書による命令の確認を求めると同時に、この命令に応じた。しかし、《そのような命令は全く出されていない》という返信を彼は受け取った。それと同時に、李之龍からと称する偽の手紙が蒋介石宛に送られた。それは、3 日の期限内で政府によって企業の国有化を行うよう要求したもので、もし実行しなければ、広州でクーデターを実行し、蒋介石を逮捕して巡洋艦に乗せ、ウラジオストクへ連れ出すと威していた。

3 月 19 日、蔣の所へ警察長官呉鉄城が招かれた。彼はそこに 2 時間居た。そして、恐らく彼らは仲違いをしたにちがいない。というのは、その後、呉は蒋介石の所へあまり行かなくなった。

まさに同じ日、蒋介石は造幣局へ移り、夜遅く会議を開いた。そこに著名な国民党員の古應芬と伍朝樞が出席した。

3 月 20 日、夜中の 3 時に蒋介石は第 2 師団の師団長劉峙を呼び出し、ただちに軍長朱培徳を捜し当てるよう彼に命じた。朱は 1 時間後にやって来た。蔣は彼に、行動を起こすという会議の決定を示し、自分達に加わるよう提案した。しかし、朱は同意せず、軍事大臣譚延闓の所へ行った。

5 時、蔣は守備隊を召集し、演説をした。彼はひどく共産主義者を非難し、中国共産党は国民党に対し反乱を起こす意図で砲艦を奪ったと断言した。劉峙はその場で、前もって用意していた逮捕すべき共産主義者のリストを大声で読み上げた。

夜間、黄埔軍校及び第 2 師団の兵士達が《中山号》と砲艦に乗せられた。李之龍は第 2 師団長の護衛隊によって逮捕され、その時彼は負傷し、その後ひどい扱いを受けた。朝、第 2 師団及び艦隊の政治委員や共産主義者全員が拘束された。

巡洋艦《中山号》の艦長になったのは国民党の有力者欧陽琳の従兄弟の欧陽格で、彼は以前からずっとその地位に就くことを懇願していた。

第 2 師団第 4 連隊は反乱者達からは、明らかに最も信頼できないものとされていた。それ故、その連隊長は更迭され、兵士達ははしけに乗せられ黄埔軍校へ送られた。しかし、彼らは上陸することを許されず、結局、2 昼夜はしけに乗ったままであった。

同時に、広州守備隊が強化され、戒厳令が敷かれ、郊外との連絡が断たれた。黄埔軍校や第 1 軍の中で逮捕

の波が広がった。反乱軍は香港一広州ストライキ委員会や我々顧問達が住んでいる広州、東山地区を包囲し、政府の建物全てに強化された隊を配置し、顧問達の援助で創られた機甲部隊を解隊した。

しかし、蒋介石は自分が軍指導部の広汎な支持を受けていないことを当時すでに自覚していたのは明らかであった。かくて、3月20日の朝のために用意されていた布告と宣言は実際には、用いられなかった。蒋介石の宣言文のいくつかに見られる基本的な考え方は、後ではっきりしたことだが、大体次のようなものであった：《私は Kommunismus を信じている。また私自身、Kommunist であると言ってもいいくらいである。だが、中国共産党員はロシア人に身を売り、《彼らの犬になった》。それ故、私は彼らに反対しているのである。》

朝、蔣の所へ譚延闓と朱培徳がやって来た。彼らは蔣が孫博士の三民主義を裏切り、反革命分子になったことを指摘し、蔣を恥入らせた。蒋介石はそれに対し、やゝヒステリックになったが一方、この会見に同席していた古應芬はこの二人をただ冷笑しただけであった。

キサンカは事件に衝撃を受け、蔣に手紙を送った。それは蔣が不在であるというメモをつけて戻って来た。

その間、政府主席汪精衛はどこかに姿を消した。百万長者である彼の妻が医者達の勧めに従って、汪にその仕事を辞めるよう主張したと説明された。4月1日から2日になってようやく、彼は単に《ずらかった》にすぎないことがわかった。彼は汕頭から感情こめた手紙を送った：《蒋介石は私の唯一の希望であるのに革命を裏切った。私はこの希望が存在している間は闘った。今や、全ては失われ、今後の事に対しては責任を負うことはできない。私は面目を失い、また持っていたもの全てを失い、今去って行く。》

しかしながら、蒋介石は3月20日の夜までに、最終的に中止を決めた。彼はこの時、ブブノフ委員会のメンバーと会い、全ては自分の意志に反して行われたと弁明し、翌日顧問達の所へ詫言に行くことと約束した。3月21日の明け方、前日逮捕された Kommunist 及び政治委員の殆んど全員が釈放された。蒋介石は仮病をつかって姿を現わさなかった。

この事件は商人達の間にはパニックを引き起こした。広州の貨幣価値は急落し、群衆は銀行に殺到し、その交換を要求した。そして多くの商店では、それを受け取ることを拒否した。

陰謀の車輪は慣性によってまだしばらくは回り続けた。Kommunist や国民党《左派》に反対する集会が反動軍人達によって開かれ、逮捕に値する中国共産党員のリストが作成され、彼らの住所が明らかにされた。今や、事件の中心に《孫文主義学会》が存在することが解った。彼らは黄埔軍校の中で反動的な集会を催した。事件の際、その首謀者達の小グループは毎日《ナンティッククラブ》に集まった。蒋介石と極めて親密なブレインは欧陽格と、かつて虎門要塞司令官で、密輸その他のダーティな仕事で解職された陳肇英であった。

蒋介石はその時まだうろたえており、最終的な決定は下さず、探りをいれていた。万一に備えて、彼は最も活動的な共産党員を監視するよう命じた。1926年3月22日の朝、反動派によって非道にも殺された廖仲愷の末亡人何香凝が蒋介石を訪れた。彼は極力自分を正当化した。次のように彼は言った。自分は感情を害している：自分の予算は削られ、武器は他の軍団へ廻された……等々。またロシア人や共産党員は自分に反対しており、自分は《コミンテルンの計画を知っている》と言った。蔣は汕頭へ行くことに決め、そこへ第2師団を率いて行くつもりであると述べた。その間、右派は自分達の政治的野望を達成するためのプログラムを更に練り続けていた。3月22日18時、反動派による2つの集会が持たれた。第20師団林師団長の所にこの兵団の将校が集まった。国民革命軍内部にある職業軍人のこのグループの要求とは、結局どのようなものであったか。それは以下の通りであった：ロシア人及び中国共産党員は出て行かねばならない。香港及び広州のストライキ参加者の手に武器を渡してはならない。彼らが広東省の地方へ進入するのを禁止しなければならない。最後に、林が第7軍の司令官にならねばならない。

同時に、悪名高い《孫文主義学会》の指導者達も会議を行った。次の事が決議された：蒋介石に要請して共産党監視のためにこのグループの8人のメンバーを第1軍に配置すること；廖仲愷は反動派によって殺されたのではなく、実に良く活動し権威を得たために、共産党員によって殺されたという煽動的な噂を広めること。今や、この同じ理由で、蒋介石の暗殺が計画されているという噂がある。根絶すべき共産党員50名のリストが集会で作成された。

図にのった右派は、第2師団の政治委員が今後は Kommunist の中で比較的穏健派と共に活動すると述べ

たにも拘わらず、彼を脅迫した。

この2つの会合の1時間半後、蔣介石は黄埔軍校生徒を前に演説を行った。蔣は腹が決まらず、部下の気持を充分つかもうとし、言質を与えないよう努めた。彼は自分が孫の最も忠実な弟子であり、決して軍閥ではないが、なろうと思えば強力な軍閥になることができたであろう、と断言した。自分の将来は諸君の手中にあると述べた。事態は諸君が決めることになるだろう。自分が革命家になることを諸君が望むなら、そうならう。反革命家になって欲しいなら、そうならう……等々。

蔣介石が迷っている間、孫科と呉鉄城を首班とする若干の国民党右派がこの状況を利用することに決め、独自にクーデターの準備を始めた。彼らの目的は呉が長官となっている警察の作成したリストに基づいて、中国共産党広東組織を壊滅させ、また国民党左派を党から追放し、政府の政策を右寄りに向けてしまうことであった。

蔣介石は状況を分析し、自分の計画を実現することは、当分の間不可能であることを明らかに理解していた。そこで、彼は朱培徳を自分の所へ招いて言った：《自分が反革命でないことを証明するために必要なことは何でもする積りだ。》この言葉を黄埔軍校に呼び出された軍事裁判所長官 Li Changta にも繰り返した。そして更に付け加えて言った：《直ちに右派を始末することが必要だ。そのために《孫文主義学会》を解散させることを決心した。同時に、《青年軍人連合会》も解散させる。呉鉄城を警察長官の職から解かねばならない。そしてこの職を貴方にやってもらいたい。こうすることによって、我々は右派の持っている実際の力を彼らから奪うことができるであろう。そうなれば呉鉄城は上海へ向け出達するであろう。》

蔣介石はこの時、中国共産党及びソ連の援助が無ければ広州は多くの敵に対して無力であることを悟った。更に、相当数の将軍達は自分が個人的権力を獲得することを全く望んでいない、と確信した。

蔣介石は黄埔島から虎門へ移った。そしてやはり、軍の指揮官達とは会うのを止め、第20師団の各部隊に演説をしてまわった。高級指揮官の間に、徐々に3つのグループが出現してきた：1) 蔣介石とその協力者；2) 政府グループ(指揮官：第2軍譚延闓、第3軍朱培徳及び第6軍程潜)；3) 広州出身者(第4軍李濟深、第5軍李福林) これらの間で闘争が繰り広げられた。

《中山艦事件》を外面的な状況からのみ見ると、全般

的な特徴は以上のものであった。この事件を引き起こした、より深い社会的原因及び中国の政治活動の展開はどのようなものであったか。これに回答を与えるに当って、私は南中国に滞在していた時の最後の数ヶ月間に起こった事件を思い出した。1926年1月、広州で国民党第2回大会が開かれた。そのメンバーには左翼的な人々が非常に多かった。代議員達が集まったところ、彼らの3分の1がコミュニスト、更に約3分の1がコミュニストの影響下にあった。この事は国民党《左派》の連中に若干の不安を引き起こした。しかし、それにも拘らずボロジン氏は後に次のように結論した。まさにこの大会において、労働者、農民、都市小ブルジョアジー、知識人の連合が実際に形成された。そして、この事は中国共産党と国民党左派との同盟という形で表わされた。

その大会で選出された36人の国民党中央執行委員のうち、7人が中国共産党委員であった。その中には李大釗、林祖涵、呉玉章、惲代英等がいた。中国共産党員は国民党内部で多くの主要なポストを占めた：農民部長に林祖涵が、組織部長に譚平山がなった。

国民党内部での中国共産党の立場がかなり強化されたのは、大衆運動の展開によるもので、コミュニストはその運動に対し絶対的な影響力を持っていた。この時、特に広州の労働者と職人の中に、明白な左翼化の動きが見られるようになり、新しい組合を組織する動きが見られた。またプロレタリアートの影響を受けて代議員会議が行われた……等々。

同時にまた、孫文の息子、孫科を長とする数名の右派の指導者が国民党中央執行委員のメンバーとなった。一体どうしてこのような事態になったのか。すでに1925年11月、国民党右派は自己の党に対して分派的活動を開始した。彼らは北京郊外西山地区で会議を召集し、孫文の三民主義の中に表現されている彼の遺訓に反対する意見を述べ、さらに国民党から共産党員を追放することを要求した。その後、党内で執拗な勢力争いが展開した。この事は第二回大会の諸決議の中にも見られた。この大会で西山派の数人が党から追放されたが、右派の一部(孫科、呉鉄城、陳公博等)とは協力関係を維持し、民族革命の全勢力を統一していくことが決議された。

右派は広州でかなりの政府のポストを手に入れた。例えば孫科は以前、広東省長であったが、今や、華北から戻り再建大臣になった。また傅秉常は外務省政治委員になった。

右派の中には孫科の支持者以外に古應芬そして官僚や地主の自警団——民団が支持する李福林がいた。珠江デルタ全体は当時、半ば匪賊のような李福林軍の支配下にあった。

孫科のグループはというと、それは買弁や香港と密接な関係を持っていた。孫科自身を全面的に支持していたのは広州ブルジョア組織の中で最も有力なものであった。孫科や彼の仲間が第一にやろうと努力したのは広州—香港ストライキの中止であった。英国人はその事に極めて大きな関心を抱いていた。広州政府に対して外国の領事や会社から苦情が持ち込まれた時、おおむね、伍朝樞が国民党中央執行委員会政治局でこの事について報告を行った。彼は帝国主義者及びブルジョアジーの問題に関する一種のスポークスマンのようであった。

孫科が到着すると政治局内部の対立は激化した：それ以前は通常、事柄は満場一致で決定されたが、今や、殆んど投票に付された。通商を香港の影響力から確実に切り離すために、広州政府直属の大規模な港を黄埔に建設するというアイデアが出された。孫科は港湾建設にともなって付近の土地が急速に値上がりすることを口実に、直ちにブルジョアジーによるその用地の投機的買占めを組織した。政府の展開した収賄に対する活発な闘争は孫科を大いに苛立たせた。

かくて、1925年の終りから1926年の初頭にかけて、国民党及び広州政府内で右派と《左派》勢力の間に深刻な分裂が生じた。両者相互間の不信は日毎に増大した。

多少は組織化し、武装化している右派の支柱となったのは《孫文主義学会》であった。それは設立されるとすぐ、《左派》の将来性とその勢力を探ろうとした。1925年12月29日、学会は正式に発足した際、示威行動を行った。彼らの目論みは次のようなことであった：国民党第二回大会前夜に、大衆政治集会で我々軍事顧問に反対し、右派の分裂主義的な西山会議の決定を支持する決議を採択することであった。しかし、広州にいる我々の同志達は、このような決議が承認された場合自分達は現在就いているポストを離れ、出て行くつもりであるときっぱり言明した。

学会の指導者達は彼らの恐喝が効を奏さないことを悟った。彼らはその代表者を国民党《左派》と我々顧問達のもとに送り、反革命のスローガンを取り下げることを約束せざるを得なかった。結局、デモは全く別の性格を帯び、国民党第二回大会を支持する手段の様

相を呈した。その上、学会員は極めて少数で、それに参加したのは千人をわずかに越える程度であり、当時としては、これは途方もなく少数であった。行進を行ったのは何人かの将校とその部下の兵士達、ミッションスクールの生徒、少数の大学生であった。また建設労働者組合の旗が掲げられていた。しかし、広州のこの組合は純粋なプロレタリアートの組合ではなく、請負業者の集まりであった。このデモの主催者は本物の大衆組織——香港—広州ストライキ委員会、海員組合——に招待状を送付したが、拒否の返事を受けとった。全体として、その計画は完全に失敗であった。反動的なその学会が単に自己の弱点を示したにすぎなかったことは、誰の目にも明らかであった。ともかく、国民党《左派》は学会に対する大きな支援が無いこと、また統一戦線に対立する能力が無いことを確信した。

国民党左派は最初、影響力を増大させつつある中国共産党と釣合うものとして、《孫文主義学会》を支持することが自分達に有利だと考えていた。その後、学会の活動が自分達をも敵としていることに気付いた。しかし、結局のところ、国民党左派には反革命の団体を追い払う力が無く、弱い抗議をするに止まった。一方、学会はデモの時までは軍隊内及び少数の学生の間のみ活動していたが、今や、農村へも自分達の影響力を拡大し、地主や富農を引き入れようとした。

農村では階級闘争がますます激化した。広東省に於いて民団は登録されたライフルだけでも6万丁を所有していた。彼らは反抗的な農民を殺し、あらゆる手段を用いて住民を脅かした。1926年春、肇慶で、大地主達は農民の活発な抵抗と闘って農村をすっかり焼き払い、広州政府に敵対するよう地方有力者達を煽動した。農民達はコミュニストの指導の下に、組合を組織した。広東省ではこの時まで、組合員数は70万人に達した。

農村の搾取者達は政府の組織強化や整備された徴税システムの導入に関しても不満を表明した。以前は珠江デルタやその他の地域で、地方有力者、民団、株式会社が少なからぬ自己の利益のために自ら政府のこの機能を果していた。こうした状況が変わることは彼らにとって都合が悪かった。第二次東征の時、大地主は国民革命軍の後方でいくつかの匪賊的暴動を組織した（西江デルタ、Guan ying 地域その他）。

個々の階級間、また都市と農村の社会層間の激しい、嵐のような対立、そしてその対立が政治的に急速に成長していく過程の中に、《中山艦事件》の深い原因を見

出さねばならない。軍事政策に於ける誤りもまたそれに一役買った。

これを明らかにするためには、先ず当時の国民革命軍の構成を述べなければならない。

当時、その兵員総勢は12万の兵士と将校であった。広東省内でそれが次のように配備されていた：汕頭地区——第1軍、広東省東部——第6軍、西江——第3軍、省南部——第4軍、最後に、広州自身とそれに隣接するデルタ——第5軍及び蒋介石の第2独立師団。

形式上、最高軍事機関は構成員15名の軍事委員会で、それには全ての軍長と局長が入っていた。軍隊全体は6軍団、2個の独立師団、珠江河口にあるいくつかの要塞で構成されていた。軍を統制するために軍事委員会の中に3つの局が設けられていた：参謀本部、政治部、補給本部。艦隊の基地は広州で、砲艦以外には無かった。空軍はお粗末であった。広州軍は何とか空中に離陸できる2機の航空機を利用することはできたが、4機の飛行機と1機の水上演習機は故障のために飛ぶことが不可能だった。

政治局は《中山艦事件》の直前、その活動を著しく強化した。国民革命軍将校の全体集会が催され、そこで汪精衛が演説をした。その後、あらゆる部隊で一定のプログラムに沿って政治学習時間が持たれるようになった。

この時、国民革命軍を強化することが差し迫った問題となった。雲南及び広西の軍閥が起こした反乱を鎮圧する前に、国民党中央執行委員会がすでに採択していた決議は軍事及び行政の権力の集中化、財政管理、軍の全ての部門での政治活動を要求したものであった。この決議が採択されたのはボロジンの功績であった。しかし、彼は仕事の一般的な傾向を示したに過ぎなかった。行動するには具体的な状況を考慮しなければならなかった。軍事全般にわたって管理を集中するために取られた具体的な手段は残念ながら、必ずしも正しいとは限らなかった。顧問団長キサンカの欠点もこの点にあった。かくて、最初、軍事委員会は週に3回開かれたが、後に1回になった。委員会は軍隊の全ての細々した事を行った(例えば、1万発の弾薬を誰に交付するかという問題が審議されたこともあった)。《国民革命軍の統制に関する新しい規定》が採択され、それによって国民党中央執行委員会と軍事委員会の軍事的役割が定められた。軍事委員会のメンバーの中から常設委員会(事実上、幹部会)が創設された。今や、汪

精衛——政府主席、譚延闓——軍事大臣、蒋介石——国民革命軍総司令官の3人組が軍の実際的なあらゆる問題を決定する際の最終的な機関となった。一方、軍事委員会是一般的な指令だけを扱った：月に1回、委員会で当面の問題に関する報告がなされた。

常設委員会内の役割分担は次の通りであった：汪精衛が政治問題全てを担当し、譚延闓は補給と兵員補充を、蒋介石は作戦と組織の問題を全て担当し、更に軍の訓練をも独占していた。キサンカ自身は国民革命軍総司令官蒋介石の顧問であり、軍事委員会が召集された際はそれにアドバイスを与えた。政治部ではРазгон (Ольгио), 参謀本部ではВ.Рогачев, 海軍ではСмирнов-Светловскийが顧問であった。

独裁者を狙い、気まぐれで猜疑心の強い蒋介石と協調することは明らかに非常に困難であった。蔣は参謀本部からの書類には一通たりとも返事を出さず、軍事委員会に出席したのは全期間を通じて5、6回のみであった。更に、《自分の》第1軍の装備の量について低い資料を提出し始め、遂には広州から黃埔島へ移って行った。

当時、すでに、広州に於いて衝突が目前に迫っていたのは明らかであった。右派の指導者孫科と唐紹儀は《左派》国民党員との衝突を避けるために、それまで上海に身を隠していたが、今や香港に戻って来た。この事実だけでも重大な意味があった。状況を十分に理解し、統一戦線の諸勢力に対して正しい路線を定めることが極めて重大であった。

ここに次のような興味深い疑問が生ずる：我々顧問達は《中山艦事件》まで、蒋介石に対しどのような評価をしていたか。彼の複雑な性格をある程度正確に把握したり、また彼との接触は極めて用心深く当らねばならないことを前以って注意することができたであろうか。

彼とは直接、仕事を共にした顧問達が色々な時期に書いた蒋介石に対する評価が3通、私の手元にある。それらを読むと、我々顧問達が華南で行なった活動の質や方法をも評価することができる。

これらの書類は疑いもなく極めて興味深く、ユニークなものなので、私は敢えてそれらのほぼ全文を引用しよう。それらは年代順に並べられている。

第1：《私は蒋介石と1年以上共に仕事をしてきたが、彼について明確な結論を出すことは今でも困難だと感じている。彼は非常に変わり易く、また閉鎖的な人物である。最初に彼に会ったのは1924年2月のこと

で、我々はその時、広州在住の小グループの顧問であったが、黄埔軍校の組織問題のことで彼を訪ねた。將軍は平服の中国服を着、身体を丸め、両手を袖に入れて坐り、通訳の言葉に対して曖昧な《エーエーエ》という音を発した。（外国語のうち彼が知っているのは日本語だけで、それは彼が日本で軍事教育を受けたからであった）。

その後、仕事が計画の段階から実行の段階に移り、急速に進展し始めた時、我々に対する彼の不信任はすっかり消えたが、彼は相変わらず無口であった。生来、彼は疑い深く、自尊心が強く、打ち解けない性格で、また権力欲の強い人物であり、ヨーロッパ的進歩の萌芽は持っていたが、中国の伝統的な考え方に囚われていた。蔣介石の性格をある程度知り、彼を上手に賞め慰撫な態度で接し、自分を彼より優れているとも劣っているとも決して見せないことによって、多くの事が達成できるのである。

組織者として、蔣介石は大卒が決まった計画は実にエネルギーに実現することのできる人であった。モスクワにしばらく滞在したこと、赤軍の事情やその指導者達を知ったことは彼に有益な影響を与えた。他の将校達と比較して、彼は軍事面でも、また将校生徒の政治教育の面でも、軍官学校に新制度を容易に導入した。

国民党支部が創設された際、蔣介石は事務局のメンバーに選ばれ、積極的にその仕事に参加し、自分の教え子や下級将校達と会議を持った。会議では確かに、彼は校長であると感じさせたが、彼らが校内で何らかの政治の方策を実行するのを妨げなかった。また、支部が行政の支援を必要とした時、彼は直ちにそれに応ずる命令を出した。

蔣介石は封建的な將軍達の軍隊の弱点が軍の基盤となる政治的意識の欠如にあることに気付いていた。自分の連隊を創り始めた時、彼は政治部と政治委員の制度を導入することに同意した。連隊内の政治工作により、彼の連隊はまたたく間に広州軍の他の部隊よりもはるかに勝るものになった。

より現代的な方法で部隊を訓練しようとする、衝突なしには事態は進まなかった。そこで、蔣介石は顧問達が導入している新しいノウハウと、従来の陳腐なやり方を守ろうとする年長の中国の将校達の古い手法との間で、巧みに処理しなければならなかった。蔣介石自身もまた、従来の慣習的な訓練のやり方を止めて新しい事を始めるのは容易ではなかった。というのは、

新しい事は自分自身が前以って理解しておかねばならなかった。しかし、この点に於いても彼は急速に良い方向へ変化し始め、数カ月後、事態はより速く進展し始めた。そして年長の将校達も彼に倣った。

顧問に対する態度：のろまで無定見な、軍事に関して余り知識のない多数の将校をより良い方向へ押し動かして導いていくことの重要性を、蔣介石は他の人々よりも早く認識していた。それにも拘わらず、これらの将校達は自分を教授と考え、非常に尊大で猜疑心が強かった。しかし、それに加えて、私の見たところ、彼は自分の部隊にいる顧問達を政治委員の組織とみなし、それを、形成しつつある彼の部隊の一つにする一種の管理機関として彼は考えた。

將軍達の栄枯盛衰は彼にとって少しも不思議なことではない、と私は思っている。彼は軍閥支配体制が中国に地方軍閥を生み出したことを知っていた。大部分の將軍はある時期まで、自分の支配者に忠実でありそれと共に彼らは大きくなっていった。しかし、彼らは少しでも翼が生えてくる（一人前になる）とすぐに、自分の領地を築き始める。分離工作、つまり、主人を不幸にさせることによって自分自身が幸福になろうとする。主人に対する陰謀が始まる。その例はごく身近にある：孫文——陳炯明、陳炯明——林虎、許崇智——彼の第1軍長梁鴻楷等：蔣介石はこれを恐れた。そこで、彼は顧問と政治部を利用して部隊を強力且つ集中化したものにつくり上げようとした。

コミニストに対する態度：先と同じ理由で、彼はコミニストが活動することを許し、更に彼らを抜擢することさえした、と私は見ている。蔣介石は馬鹿ではない。彼は自分の命令や国民党の圧力以外に、コミニスト達に影響を及ぼしているのは今やますます強力になりつつある別の党の力であることをよく知っている。コミニスト達が勝れた、忠実な活動家であるのは正にこの理由からである。

広州商団事件が起こった時、要地には全てコミニストが指揮する中隊が配置された。第1連隊では3人の大隊政治委員のうち2人がコミニストであった。

蔣介石は閉鎖的で病的に自尊心が強い人物であり、中国史の舞台に登場することを夢見ていた。それにも拘らず、彼は自分の性格を抑え、大衆の動向を知る能力を持っている。黄埔軍校の第一回卒業生が任官されず、将校生徒としての俸給を少し上げて数ヶ月間部隊へ派遣され、分隊長、小隊長、さらにある場合には中隊長として実習するという決定がなされた時、生徒達

はこの命令に従おうとせず、抗議した。(黄埔軍校を基盤として最初の数個連隊が創設され始めたところであった。それ故、卒業生を将校に任官させるためのポストが無かった。資金を節約し、この状況を打開しなければならなかった。)蒋介石はこの問題に対して正式な態度をとらず、黄埔軍校党代表廖仲愷と政治局員が参加した話し合いを通じて、次のように説得した。将校生徒は国民党の先輩としてもこの命令を実行しなければならない、またそれによって、自分達が書類上だけではなく行為の上でも国民党員であることを立証すべきである。同時に、彼は命令の主旨に反しないよう考慮して、彼らの食事と住居関係を将校達と同等にした。将校達はこれに反対であった。これに類似した命令を更にいくつか挙げることができる。

軍人として蒋介石は普通の中国人司令官と殆んど変わらない。彼は大多数の司令官と同様に、意気が上り易く、また落胆し易い。そして中庸や冷静な自制心を知らない。作戦上の問題を解決する際に臆病なのは、恐らく、力を失って、泥沼にはまり込むのを恐れたせいであった。そのために彼は一層用心深くならざるを得なかった。しかし、東征作戦の終り頃には、彼の決定はより断固となり、自信が増大した。

他の將軍達は伸び盛りのライバルをどのように見ているか。彼らは皆外見上、お互いに友好的であるが、実際には敵である：蒋介石に対して独特な反感を抱いており、彼の所有する軍隊の兵員数は多くないにも拘らず、彼らは何かしら恐怖を感じ、黄埔軍校の成長は彼ら自身の過去の成長や通常のライバルのそれとは異っていることに気付いている。そこには彼らには理解し難い、何か他の力が成長している。それは何か異なった基礎、そして彼らが本能的に感じ、それを見て不安を抱くけれども理解できない力の上に成り立っている。

蒋介石はどこまで我々と一致して進んでいくことができるであろうか。蒋介石は左派中道と見做されているけれども、勿論、この問いに答えるのは難しい。彼は一旦強くなると、普通の督軍になり、左派を演ずることを止めるか、或いは更に先に進むのだろうか。》

ここに別の顧問が書いたより全般的な評価がある：蒋介石は黄埔第1軍軍長である。ロシアに行ったことがある。彼は軍人の中で誰よりも我々に近い。彼は政治に通じている。非常に自尊心が強い。ナポレオンを研究し、それを日本語で読んでいる。日本で学んだ。浙江省出身で、始終そのことを考えていると以前は思

われていた。

許崇智が総司令官だった時、軍事面で他の將軍達の間で特に目立った存在ではなかった。彼は事実上、第一の地位に就かざるを得なくなった今はもう、一軍長の狭い見解を越えて軍全体の任務を理解するようになっている。惠州を占拠した後、彼は政府に電報を打った。その報告の最初の部分で、広東省に於ける軍事上の展開に自分の功績があったことを指摘し、自分はこの展開に際しての任務をよく知っていると述べた。更に次のように書いた。自分はよくある軍閥になるのを恐れている。そこで自分を軍の任務からはずしてくれるよう求める。彼は軍隊を持っていないので軍閥にはなり得ないし、彼の兵团は彼個人の軍隊ではなく、党の軍隊であると説明された時、彼はこの考えに飛びつき、演説の中でこの考えを引用した。

彼は早く決定を下すが、しばしば軽はずみに決定をし、その後それを変更する。彼は頑固で、自分の意見を押し通したが、一旦政治的決定を下すと、行き着く所まで行かないと気が済まない。彼は軍隊内で権威があり、軍務の上では部隊を締めるが、軍務以外の時は指揮官達と親密な関係を作り上げる能力がある。》

最後に3つ目の評価：《蒋介石は国民革命軍総司令、黄埔軍校校長、国民党中央執行委員会政治局委員である。浙江省出身。日本陸軍士官学校で教育を受けた。中国語以外に日本語を知っている。ソ連へ行ったことがある。

彼は無口で疑い深く、極めて自尊心の強い人物で、絶対に誰も信用しない。とても心配性で権力欲が強い。最初に我々と共に本格的に仕事を始めた將軍達の一人であった。勝れた組織者。自分に絶対服従をする人々を自分の周囲に選び出す能力を持つ。新機軸の必要性を納得した場合、比較的容易にそれを導入する。政治的に左翼で、左の方へ進んでいる。彼を夢中にさせ得るような左翼思想の影響を容易に受ける可能性がある。彼の政治的態度は彼を取り巻く人々次第である。彼が決定を下す時は、秘かにそして果敢に行う。他人の意見を余り考慮に入れず、また時には全員に従う。》

私が広州で勤務して以来50年が過ぎ去った。多くの事を忘れてしまったのは当然である。上記の評価を誰が書いたのか、私には確認できなかった。その上、このうちの最初のものを私が書いたのではない、と今や断言することができない。それを作成することができたのは間違いなく二人の人間だけであった。つまり Терешатов か私かである。

いくつかの文体上の特徴や評価文の結びから見ると、私がそれを書いたと思わざるを得ない。実はある時、私はボロジンに質問をしたことがあった。《蒋介石はどこまで我々と行動を共にするだろうか》——すると今度は、彼が私に反語的疑問で答えた：《ところで、どうして彼が我々と行動を共にしないことがあろうか》勿論、この言葉は上記の引用文全てと同様に、蒋介石が統一戦線及び中国革命軍の陣営の中に長期に留る可能性はどの程度あるか、また革命の一時的な同盟者として、その革命の展開の段階でどの程度彼を当にすることができるかを問題にしている。《我々と共に》という表現は正に次のような意味である。我々は心の中で常に、革命中国と自分とを結びつけていた。《我々と共に》は《革命と共に》と読まねばならない。ともかく、私は蒋介石と一緒に長い間仕事をして、彼を最初の評価に述べられているように見るようになった。

私の見る所では、この3つの評価は全て別々の顧問によって書かれたものであるが、蒋介石の性格について完全に一致した見方をしている。我々顧問達は蒋介石の本質を知っていた。これらの評価全てにこの政治的人物に対する正当な不信感がにじみ出ている。その中に唯一蒋介石に適した、全く正しい仕事のやり方が描かれている。要するに、蒋介石への対処法が見つかったのであった。

《中山艦事件》を言わば、熱いうちに分析した最初のもので1926年3月24日、広州で行われた顧問者会議でブブノフが出した報告書の中に見られる。彼はこの事件の社会的基盤を探ろうとした。報告書の結論はこの問題を真剣に研究した結果であった。ブブノフ委員会は黄埔軍校に立ち寄り、軍長の一人一人と面談した。3月15日、軍事委員会の会議に蒋介石も出席していた。その会議で、ブブノフ委員会は汪精衛の政治報告を聞いた。しかし、肝要なことは、モスクワから来た同志達自身がこの事件の目撃者であり、一時的にせよ彼らが実際に逮捕されたということであった。

ブブノフは《中山艦事件》を《ロシア人顧問と中国人の政治委員に向けられた、小さい半暴動》と見做した。彼の意見によると、この事件は中央集権化した国家権力と軍閥支配との矛盾、都市小ブルジョアとプロレタリアートとの矛盾、最後に国民党左派と右派との間の矛盾を反映していた。この時、ブブノフは次のように考えた。国民党左派は都市小ブルジョアと、極めて条件的であるが農民の利益を代表しており、一方、右派は買弁ブルジョアの上層部で、香港の

政治的買弁でもある連中の利益を代表している。ブブノフは国民党右派と《孫文主義学会》を同一視していた。

勿論、この分析はある程度急いで行われたものであるが、重要な事は、政治的興奮がまだ鎮まっていない、クーデターの試みのわずか数日後に、ブブノフが我々軍事顧問にこの事件に対して徹底した階級的、マルクス・レーニン主義的アプローチをするよう方向づけしたことであった。ブブノフは《中山艦事件》が軍事上、また政治的指導全体の大きな過ちによって引き起こされたものであると指摘した。第1に、国民党内部の対立も軍隊内の対立も予想できなかった。第2に、広州の指導部の力量と統一を過大評価していた。第3に、3月の行動の過程で、極めて明確になった軍事上の大きな逸脱を前以って発見し、一掃することができなかった。第4に、参謀本部、補給本部、軍事委員会政治局の統一化は非常に急速に行われ、中国人の將軍達の心理と経験を考慮に入れなかった。第5に、將軍達は強い支配の下にあった。実際、指揮官達の所に部隊内の命令に署名する権限を持つ政治委員がおり、軍事制度上、政治委員は一層大きな力を持っていた。更に、我々顧問も大きな権威と影響力を持っていた。ブブノフが比喩的に言っているように、中国の將軍には5つの首輪がはめられていた：参謀本部、補給本部、軍事委員会政治局、政治委員そして顧問。だが、これは中国の軍隊内にあった流儀とは一致していなかった。ブブノフは中国の軍部の持つ過敏な民族主義を特別に配慮するよう、我々顧問達に特に要請した。我々外国人軍事専門家が彼らに対して行ういかなる働きかけも、彼らに激しい不満を引き起こすことがよくあった。

ブブノフは複雑な広州の状況を実に正確に把握した。彼は真のコミュニストとして、些かも原則からはずれず、その問題にアプローチした。ブブノフは我々同志に新しい手法で仕事を続けるように、また急がず、慎重であるように求めた。革命の重大な成果が少しも失われていないこと、そしてそれをより拡大していく準備を続けねばならないことに、彼は疑念を抱かなかった。

ブブノフはその後の仕事全てを北伐と結びつけた。彼は北伐が必要であるという強い信念を兵士達が持っていることを強調して、《国民革命は南中国に閉じこもってはいならない》と言った。同時に、彼はこの北伐を純粋に軍事行動と見做す誤った傾向を同志達に警告した：《正しい、明確なスローガンを持たずに北伐

に乗り出すこと、また農民大衆を引き寄せずに北伐に乗り出そうとすることは決定的な誤りを犯すことを意味する。》

ブブノフは我々顧問がいかなる場合においても自己の権限を越えてはならないこと、またどういう形にせよ部隊を直接指揮してはならないことを強調した：《この方面での行き過ぎは第1に、ますます大ブルジョアジーの反発を買う。第2に小ブルジョアジーの動揺を引き起こす。第3に、未だ残っている中国軍閥の習性を何度も復活させることになる。第4に、国民党右派と左派との間に衝突を強め、煽りたてる。第5に、《赤の危険を追放せよ》とのスローガンの下に、反共的気運を高める。第6に、国民政府の危機をつくり出し、結局は国民革命の失敗の危険性を大きくさせる。この危険に気付かない者は中山艦事件の経験から、実際の教訓を何も得ることができないであろう。》

国民党左派は依然として極めて弱体で、相変わらず《將軍達の集まり》であった。彼らは心の中では互いの結びつきがあまりなく、また大衆との結びつきもほとんどなかった。ブブノフは以上の事を指摘し、左派を見守るよう顧問達に求めた。《基本的な任務は、左派での仕事を通して国民党自身を直接強化することにある；勿論、この仕事は極めて時間のかかるやり方であり、大きな忍耐を必要とする。また中国共産党には、柔軟で非常に穏やかな、そして自制力のある戦術が求められるであろう。》

A.C. ブブノフはロシア革命運動の豊富な経験を持ち、戦術のあらゆる實際面に精通し、直接革命が行われている状況下での戦いだけでなく、力を結集させ入念な仕事を必要とする時期での戦いも体験していた。正にこの事情——多年に渡って10月革命の勝利を求める闘争に積極的に参加すること——から、ブブノフが中国共産党の活動家に対し同志的な批判や種々の具体的な助言を与えたのは当然であった。コミュニスト・インターナショナリストとしての義務がブブノフに、こうするよう命じたのであった。況して、中国共産党は当時、まだ歴史が浅く党員数が少なかったので、なお一層そうであった。

ブブノフは中国共産党がこの5カ月前後の間に大いに発展し、労働者によってその隊列がかなり補充できたことを、大いに満足して指摘した。同時にまた、彼は中国共産党の活動が持つ、色々な非常に重大な弱点も指摘した：《党内の教育活動は確かに無視されている。我々が見たところ、このことは極めて明らかであ

る。我々は中国共産党が若干、軍事行動に傾き過ぎていると考えている……党の力を軍に注ぎ過ぎている。》ブブノフは国家機構の強化という点で、中国共産党は国民政府の支援に、より一層の注意を向けるよう助言した。

労働組合のことに触れて、ブブノフはその主要な欠点が大衆の生活を組合が知らないこと、大衆の日常的な利益を把握することができていないこと、殆んど経済的な闘争を行っていないことにありと指摘した。彼は組合組織が極端に零細であり——広州には当時130以上もあった——、またそれは反動的な思想を持つ組合であり特に機械工の革新的な組合と協力して活動する力も意志も無い点に言及した。《全中国労働組合連盟が真に大衆運動と結びつくためには、広州から他の場所へ移るべきであった》と彼は言った。この勧告は全く当然のことであった。何故なら、事実上大産業のない広州の産業労働者の指導者達は非常に無力であったからである。

ブブノフはまた、労働者の武装兵力——労働者親衛隊の行動を批判した。それは《本来それ自身が全く資格のない警察の機能を我が物としていた。》

これらの意見を総括すると、次のように確認できる。中国の同志達は第一に、労働者との結びつきが不十分であり、セクト的傾向があること、また軍事活動にあまりにも注意を向けすぎていることを、ブブノフは友人として批評した。

二つの会談

ブブノフ委員会は中国共産党の活動を綿密に調べる機会を得た。1926年3月2日、委員会のメンバーが上海にいた時すでに、中国共産党委員会総書記陳独秀との会談が行われた。彼は政治状況の中で最も重要な諸問題について自分の見解を極めて詳細に話した。無論、当時の中国共産党の活動を完璧に述べるつもりは全くないけれども、同志達との対話や記録から、この問題に関して私が知るようになった全てを述べることは有益である、と私は思っている。中国共産党は当時、非常に若い党で、複雑な条件の下で闘争を行っていたことを考慮に入れざるを得ない。党の発展の歴史を客観的に再建する際に、無条件に興味深い多くの資料が失われてしまっているかも知れない。或いは中国の同志達によって全く書き留められていなかった。我々顧問達の覚え書きの形で若干残っているにすぎなかった

り、事件に直接参加した人々の記憶の中にのみ残っていた場合もある。それ故、断片的な、且つ乏しい情報でさえも価値を持っている。

陳独秀は《赤に反対》というスローガンが当時、あらゆる反革命分子を結束させたことを指摘した。彼の意見によると、反動派陣営に加わったのは軍国主義者、出世主義の役人、インテリの一部で、さらに労働者層出身の若干の裏切り者さえもいた（もっとも極めて少数ではあったが）。

陳は中国ブルジョアジーの政治的立場を考えると、それは本質的には反革命的であるが中立的に見られようと努めている、と評した。また彼は次のように言った。ブルジョアジーは《自分が中立であるように見せようとしているが、実際には中立的になることはできない。ブルジョアジーの中で最も急進的な一部でさえも反革命的である……しかし、ブルジョアジーを全て反動派と見做す必要はない。その一部は中立的になる可能性がある。……中国の産業資本家の多くは買弁出身者である。民衆が何らかの形で自己の力を発揮し始めていることを知るや否や、産業資本家は後ろ向きになり、反革命分子と行動を共にする。》

陳独秀はブルジョアジーの中立性の根拠をどこにどこに見出したのだろうか。先ず第1に、労働者を恐れたこと、第2に、《赤に反対せよ》のスローガンは軍閥が提唱したものであってブルジョアジーはその呼びかけに対して冷淡であった。その上、《国際ブルジョアジー——帝国主義者と中国の軍閥とのコンタクトは完全なものではない》、また《帝国主義者と軍閥の間には意見の相違がある》等々。あまり明確とはいえない陳独秀のこれらの要約全体から一つの結論が生まれた。——彼はブルジョアジーを最上の場合でも中立的な存在と考えている。

この階級に対して一体、どんな路線をとるのが正しいと陳は考えたか。《この階級に対する我々の政策はこれを革命勢力と同じように当てにしなければならないという点にあり、またブルジョアジーが中立を維持し、ひどく反動的になるのではなく多少とも穏健であることを期待する点にある。》

ブブノフは各階級の力を以上のように評価するのを聞いて、中国の民族革命の勝利を確実なものにするためには、どの階級とどの階級が連合すべきかを明確にするように陳に求めた。陳は列挙した：労働者、農民、ごく限られた数の進歩的軍閥、小ブルジョアジーの左派（陳は数回強調した：《左派だけである……新興の中

国のブルジョアジーでさえも民族運動の方向へ進んでいない。このことは事実が示している。彼らは主として反革命側に立っている》。

そこで、ブブノフは再び具体的な質問をした：ところで、手工業者、零細商人はどうか。陳は答えた：《彼らなしでは民族革命は勝利を得ないであろう。都市ブルジョアジーを民族革命の陣営に引き寄せる必要がある、何故なら、労働、農民運動はこの地ではそれ程発展しておらず、小ブルジョアジーを必要としている。正にこの事実から、中国に於ける国民党の存在の必要性が生まれる。》

無論、当時の中国共産党指導部の考えを全般的に評価することはブブノフ委員会の任務には入っていなかったが、陳独秀は革命陣営の構成分子を狭く考えていた。彼の意見には、全般的に何か偏見のある政治的展望が感じられた。そこで、レブセ、続いてブブノフが自己の見解を述べた。レブセは言った：《上海の事件（1925年5月30日）後、ブルジョアジーが労働者をとっても恐れ、その恐怖から自己の基本的な目的を否定しようとしている、と考えられるだろうか。》ブブノフは彼を支持した：《上海では革命運動の退潮の時でさえも、大ブルジョアジーの多くの代表者達は民族闘争から離れず、単に指導権を手中におさめようとしたにすぎなかった……。貴方は小ブルジョアジーの“一部”と言ったけれども、“まるごと”と言わねばならない。小ブルジョアジー抜きでは前進することはできない。この際、小ブルジョアジーの一部ではなく、手工業者、小中商人を含めた都市小ブルジョアジー全体を問題にしなければならない。》

陳独秀の反対意見はとるに足りないものであった。彼は自分の反対を次のように要約した：都市ブルジョアジー、小商人の指導者達は分解しつつあり、大衆は革命化している。だが、指導者達は小ブルジョアジーと協力して活動し始めている。その上、学生の一部は反革命化している。《最も緊急な問題は知識人や小ブルジョアジー全体にどう対処すべきかである》。

その時クビャクが口を挟んだ。陳独秀は長々と、断定的に、しかも教義論のように、教授の講義風に話した。しかし、彼は農民の事については、革命陣営の構成分子として一般的に言及した以外には全く触れなかった。《どのようなスローガンの下に中国共産党は現在、農民を団結させようとしているのか》とクビャクが質問した。陳が説明した——《我々は国民党の名の下に、農民の中で活動し、同時に、可能な所でのみ我々

の旗も掲げている。かくて、農民運動が強力な広東では、純粋に農民出身の共産党員が300名おり、湖南には200名余りいる。農民の為のスローガンや要求については、それらは小冊子に印刷された。それは最小限の要求であった。北京では5万部を印刷、広東——5万部、上海——2千部、それらを農民達に配布した》。

クビャクは明らかに、この回答には不満であった。《中国共産党は農民の為に何を要求しているのか》。と彼は再度質問した。陳独秀は、要求を自分自身が作成したのであるが、書き付けなしでそれを伝えることはできない、と実に見事な言明をもって答えた：その中で問題となったのは、原則として土地を農民に与えねばならないという事であった。(陳は説明した：《このスローガンは正式に提起されたものではなく、単に農民に説明されたにすぎない》。) 要求の具体的な内容は次のように要約された：1) 農民からは政府の税金だけを徴収すること(実際には、軍閥は5、6年先の税金を集めていた)；2) 村役場と並んで農民組合に、税額や農産物の価格を決定する権利を与えること；3) 農民が組合を組織し、武装し、地方自治体の選挙に参加する権利を認めること。次に陳はいくつかの更に小さな要求——政府による土地灌漑の改善、信用協同組合等——を列挙した。《私が今憶えていない要求がこれ以外にもある》と陳は口ごもりながら小さい声で言った。しかし、クビャクは止まらなかった：《農民達はこの綱領をどのように受け止めたか》陳の説明では、この宣言はこの前の中央委員会総会の後に出され、しかも極最近のことなので、これに関しては何処からもまだ報告が届いていないということであった。

陳独秀のこの答えが委員達を驚かさないわけにはいかなかった、と私は思う。議論は圧倒的多数を占める農民について行われたが、すぐに陳が農民に対するスローガンに対してあまり心を動かしている様子を示していないことがわかった。それらの一部を彼は覚えてもいなかった。

その代りに、彼は国民革命軍の北伐を即時実行する必要性を熱烈に述べた。彼の論拠は次のような点にあった：呉佩孚は軍閥の首領としての威信を殆んど持っておらず、彼の軍隊も大きくなかった。更にその軍隊も分散し、將軍の中の何人かは国民革命軍側に移るよう話しがまとまる可能性があった。今、我々が呉佩孚を撃滅することができなかつたならば、彼は奉天派と休戦を結ぶであろう。彼は馮の国民軍を打ち負かし、英国と結んだ後、自己の主要な敵である広州に対

し攻撃を始めるはずである。もし、呉を粉碎することに成功したならば大きな政治的成功をもたらすであろう。

陳は、自分が考えていることは北伐、中国の民族解放を求める最大の軍事行動、国家の統一ではなく、それとは異なるものであることを八方強調した：《我々は広東から遠征軍を送り出すことによって、必ず革命を行おうと考えてはならない。全くそれは違っている……我々は現存の勢力を救おうとしているのである》。陳は広東省から2万の兵員——例えば、2個師団で湖南人と雲南人から成る——を派遣すれば充分であると考えた。北伐のための軍隊は湖南でも広西でも見出すことができるであろう。重要な事は奉天派が天津を占拠しないうちにチャンスをつかむことである。《江西省からの全ての情報や湖南省のソ連軍事顧問の報告によると、そこには広東側と連係ができるなら呉佩孚に反対するために利用できる軍隊が存在している》ことを考慮する必要がある。《もし我々が天津から1万名(即ち馮玉祥の国民軍から)、湖南から2万名の兵員を受け入れ、広東側が2万名を派遣するなら、その部隊は呉佩孚を撃破するに十分であろう……軍が呉佩孚を撃滅した暁には、それは広東へ戻り、そこで必要な秩序を確立することができる》。

陳独秀はあらゆる角度から広東の顧問達を批判した。彼らは、反革命がまだ存在し、軍隊内には政治工作が導入されておらず、財政は到底すばらしい状態とは言えず、また総体的に言って、実に《多くの主観的誤り》を犯している広東省に於いて、安定した状態を作り出すには約半年必要であると考えていた。

《私は広東が行おうと考えているよりもずっと早く、北伐軍を派遣することができるし、またしなければならぬと思っている》と陳独秀は言った。陳は中国共産党中央委員会の唯一人の委員として上海に留まり、何度か広東に電報を送り、またそれらのコピーをカラハンにも送った。そしてその中で、彼は北伐に関する自分の考えを述べ、また北伐を《呉佩孚に反対する広東軍の遠征》と呼んだ。

委員達は陳に來たるべき軍事行動の戦術に関するいくつかの質問をした。レブセは当時いくつかの東部の諸省と上海を支配していた、軍閥孫伝芳の立場を判定するよう求めた。孫伝芳は国民革命軍が北伐を行っても、《呉佩孚とは強固な同盟関係に入らないであろう》と陳は考えた。彼は今のところ、帝国主義者のうちのある決まったグループとは結びついていない。中国共

産党中央委員会は当時国民党がやり始めた、孫伝芳との交渉には反対していない。《我が中国には社会主義革命は無く、あるのは民族革命である》こと、またソ連は正に、中国の民族解放を支援しているのであることを孫伝芳に説明しなければならない。軍事面では、孫伝芳と馮玉祥の国民軍を結びつける努力をする必要がある。

ブブノフは馮玉祥に対する中国共産党の態度について質問した。陳は答えた。《私の意見では、現在の戦いで第1、第2、第3国民軍は一つのものとするべきであり、彼らは帝国主義に反対する闘争を行っていると思われるべきである。客観的には、これは革命のための闘争である……我々は今のところ、国民軍を革命陣営に入れておりそれを無条件に援護している》。陳独秀は馮の軍隊に対し全般的な評価を下した後、次の事を指摘した。《3つの国民軍が共産党に対して持っている意義について》は現在、直接述べることはできないが、率直に言って、それらは共産党に反対している。第2国民軍の部隊は極めて反動的な傾向があり、我々コミニストに対してだけでなく、国民党にも反対している；だが、いくつかの極めて小さな部隊のみが比較的我々と親密である》。国民軍はその相互関係も、広州との関係も極めて弱い結びつきであるのに、一方、張作霖は帝国主義者を通じて呉佩孚と良好な関係を保っている、と陳は強調した。

ブブノフは国民軍の指揮官達が主として商人や中間層から成っており、少なくともその80%は革命の宣伝によって味方に引き入れることができることを指摘した後、陳独秀に、革命のために国民軍を味方に引き入れることが急務であると考えるかどうか質問した。陳はコミニスト達が国民軍の諸部隊の中で、自己の宣伝を強化しなければならないことを認めた。

陳独秀の発言には、中国の民族——革命運動の前途を評価する上で、ある種のペシミズムが感じられた。彼は論じた。《どちらの側の運動の方に勝利のチャンスがより多くあるか。私の意見では、ごく近い将来、反革命勢力の方に民族運動側よりも、より大きな勝利の可能性があると思う。何故なら、反革命分子は革命側よりも結束が強いからである》。1926年3月、陳独秀はこの時期を革命前夜ではなく勢力集積の時期と見做していた。革命がどのように展開していくかを陳は次のように描いた：《中国では大衆運動が何人かの進歩的な軍閥を後援し、その軍閥は進歩的な政策を助長し、進歩的政策は大衆運動を促進する等々……真の革命を期

待することは困難であるが、もし国民軍が呉佩孚に勝利するなら、その戦争の条件の下で、新しい革命の高まりが期待できる。たとえ呉佩孚が張作霖に勝ったとしても、次に続く半年は極めて困難な時期となるであろう》。国民革命軍による北伐と関連して起こった革命運動の新たな且つ巨大な高まりのわずか数カ月前に、陳独秀は状況を以上の様に判断した。

中国共産党は民族革命が勝利した後、労働者の利益のためにそれを更に一層発展させようとしているのかどうか、ブブノフは尋ねた。陳独秀はこの質問が時機に合っていることをごく一般的な言い方で認め、また国民党右派が階級闘争を統一戦線の破壊と見做していることに不満を述べた後、次のようにつけ加えた：《我々コミニストと国民党左派は統一戦線を強化するためには、階級闘争が絶対に必要であり、それは民族革命を強化しつつ、統一戦線とうまく平行して進行していると考えている。無論、民族革命に際して、労働者、農民は若干の譲歩をしなければならない。何故なら、労働者、農民にあまりに多くのものを与えすぎて統一戦線を破壊してはならない》。

その後の会談で、陳が革命の勝利と重大な革命の成果を全く遠い将来の、不確定な事と考えていたことが実に明白になった。呉佩孚に勝利し、それに続いて奉天派と休戦を結ぶ際、広州と同じような政府をつくることはできないであろう、と彼は言った。成員として国民党右派や軍閥孫伝芳を含んだ臨時政府を設立することのみ可能であろう。《臨時政府は平等条約を廃止することができないであろう。それはただ条約を修正したり、労働組合、農民組合に関する法律を發布することができるだけであろう。もし大衆が組織されるならば、その力は増大し、中国経済は発展するであろう。しかし、帝国主義を粉砕するためには他の時期を待たねばならない。今は未だその時ではない。》陳のこうした判断の中には、明らかに、革命勢力、大衆運動の前途に対して右翼機会主義者の持つ懐疑が感じられた。しかし、クビャクが《国内で広州の権威が増大すると、それは共産主義運動や共産党の成長に対してブレーキになる可能性はないか》と質問した時、陳はきっぱりと答えた：《否、決してそんなことはないであろう》。

委員会は中国共産党中央が総会で中央委員会を上海から移す決定をしたことに、遠回しにはあるが困惑を示した。移転によって共産党とその主要な階級的基盤——プロレタリアートとの結束が弱まることは明らかであった。上海では《労働者や学生の大多数は我々

の側にある》と陳独秀自身が強調した。陳は中央委員会を移すという考えに、断固反対であることを表明した。彼は言った：《私は個人的には、中央を上海に残すことに賛成である。第1に、上海はプロレタリアの地域であり、中国のプロレタリアの大部分がここに集中している。第2に、上海には極めて勝れた通信施設が備わっている》。陳は、広州に中国のコミニスト本部を置いてはならない、さもないと中国共産党は《広州共産党として》活動することになるだろう、と指摘して、広州の組織を再度非難した。

中国共産党の当時の総書記陳独秀が《中山艦事件》の可能性を予見していたかどうかは大変興味深い。陳との会談がこの事件のわずか2週間余り前に行われたことに留意しなければならない。陳の言葉から、彼もまた状況を把握していなかったことが明らかである。以下は広州政府についての彼の発言である。《広州には事実、コミニスト達と協力して活動している国民党左派が存在している》。軍について：《第1軍、第2軍に於いて、我々は十分に活動している》。我々が既に知っているように、正に蒋介石の第1軍こそクーデターの武装兵力であった。

会談の参加者が私に語ったところによると、陳は労働者風の服装はしていたけれども、プロレタリア政党のリーダーには全く見えなかった。彼は実に教授風に振舞い、また話し方もそうであった。彼は落着かなかった。というのは、英国租界の警察に委員会の到着したことが報告されており、警察の尾行を恐れていたからであった。

これとは全く異なる印象を、当時の中国コミニスト達の中で最も著名なリーダーの一人、張太雷が与えた。委員会は中国共産党広東委員会会議の席上、彼と会見した。広州にいた顧問達の招待を受けて、委員会は《中山艦事件》のすぐ前に広東の政治状況に関する張太雷の報告を聞いた。背が高く、すらりとした、きちんとした身なりの張太雷はモスクワから来た友人達と精力的に握手をし、ただちに報告を始めた。彼は大衆の支持を受けることのできる経験豊かな宣伝家のように、インスピレーションを与え、情熱的に且つ確信を持って話した。

張太雷の広範な報告の中で最も興味を引いたのは、国民党右派と左派の間の相互関係に関する問題の解明であった。彼の考えでは、1925年の秋が広東に於ける国民党左派の独裁の時期であった。国民党右派の西山会議から国民党第二大会までの期間を、彼は次のよう

に描写している：左派の動揺と右派の積極化。結局、大会の後、以前にも増してはっきりした内部の対立を抱えたまま、連合の時期に入った。

第二大会の前に、上海の右派のセンターは中国共産党中央と交渉を行った。国民党の枠内で右派と協力して活動するためには、いくつかの取り決めをする必要があると考え、中国共産党中央はそれに応ずる決議を採択した。しかし、華北では、国民党の《左派》は右派と協力することを願わなかった。中国共産党中央は交渉を成功裏に終えるために、大会の開催を2週間遅らせるよう主張した。広東コミニストは状況を違った風に判断していた。彼らは国民党右派と《左派》との協力という戦術は広州の革命基地にとって危険であるという点から出発し、結局のところ右派が状況をコントロールするであろうと危惧した。それ故、大会は予定通り1月1日に始まった。それにも拘らず、私がすでに書いたように、大会は中央執行委員会に於ける右派の代表権に関する問題を解決する上で譲歩した。中央執行委員会の中で中国共産党の絶対数は増大していたが、パーセントでは増えていなかった。国民党内でコミニストが主要なポストを握っていると右派が言明したので、中国共産党中央は中央執行委員会内の共産党のメンバー数を減らすことに着手するか、あるいは全く中央執行委員会に入らないことさえ可能であると、当時考えた。

張太雷の報告は広州で形成されつつあった状況に対して不安を感じさせた。陳独秀と異なって、彼は闘争が先鋭化しつつあることを知っていた。彼は特に、《孫文主義学会》の活動が増大していることに不安を感じていた。《左派は右派の指導者には打ち勝つであろうが、それにも拘らず、右派は民団や孫文主義学会の形でその基盤が残るであろう。我々と右派との闘いは今や、大衆活動の領域に移っている。左派は行動が果敢なところを見せていない。"孫文主義学会"は今のところ、政治局の下にある。そして恐らく、蒋介石と汪精衛はこれを孫文主義研究の学問的結社にしようと思っているのであろう。しかし、それはたわごとである》。張太雷の次のような結論は特に注目に値する：《多分、右派は今まさに行動を起こそうとしているのであろう。最近、第4軍と第1軍の間に分裂を持ち込もうとする試みが実行された。今や、廖仲愷暗殺の前夜の状況に似ている。妖言やパンフレットが流布されている》。

張太雷の報告から、《中山艦事件》の以前に最も洞察

力の勝れた коммуニストの指導者が右派の企図に関して、深刻な危惧を抱いていたことがわかる。残念なことに、そうした危惧はあまりはっきりとは表現されなかった。そして重要なことは、それに応ずる組織的な手段がとられなかったことである。そこで蒋介石の冒険が коммуニストの不意を襲った。

蒋介石のマキャベリズム

《中山艦事件》の後、中国共産党と国民党との関係はどのようになって行ったか。この時期、国民党《左派》はやゝ途方に暮れていた。残念なことに、中国共産党広東支部は反動派の攻撃に対して、素早く、エネルギーに反撃するための結果ができず、有意義な戦術的技量を発揮することができなかった。その間、蒋介石は当初自分のやったことに驚いたが、次第に落着きを取り戻した。彼は国民党中央執行委員会拡大総会を召集することに成功し、中国共産党との組織上の関係を律する原則が見直された。

蒋介石の陰気で柔軟性のある手法、そして同時に、揺れ動く彼の立場は総会を前にした彼の行動の中に表われていた。中国共産党は国民党から総引揚げをしようとやって蒋介石を威した。すると彼はそれに同意しようとした；だが国民党《左派》は反対を表明した。そこでは彼は即座に自分の立場を見直した。総会の一日前、彼は中国共産党の指導者の一人に коммуニストとの関係に関する彼の提案文を見せた。もし中国共産党が自分の考えている手法に賛成してくれるならば、右派を負かすことができる、と彼はもっともらしく断言していた。彼はその同意を得た。

国民党中央執行委員会総会が1926年5月15日、開催された。そこで採択された決議はその後の事件、特に国民革命軍の統一戦線の枠内での闘争の展開を理解する上でとりわけ重要な意味を持っているので、私はそれを全部ここに引用する：《1. 孫文が打ち建てた孫文主義は国民党の基礎であり、孫文及び孫文主義に関していかなる懷疑も批判もあってはならないことを理解するよう、国民党に加入している国民党以外の政党の党員に対し、当該政党は命令しなければならない。2. 国民党に加入を望んでいる他党員のリストを、当該政党は国民党中央執行委員会に提出しなければならない。3. 国民党員であって、執行委員会、国民党高級機関（中央執行委員会、省委員会、特別区）のメンバーの職務を果している他党員数は執行委員会の構成員の

1/3を越えてはならない。4. 国民党に加入している他党員は中央執行委員会の各部長の職に就く権利を有しない。5. 国民党員は何人によらず、党の許可なしに国民党の名でいかなる党の集会も召集する権利を有しない。6. 全ての国民党員は党高級機関の許可なしにいかなる政治組織も創設する権利を有せず、またいかなる政治行動も行う権利を有しない。7. 国民党に加入しながら他党から何らかの命令を受けている他党員は、それを連席会議に提出し、検討と同意を得なければならない。8. 国民党員は国民党からの脱党の許可を党から得ることなしに、他党に加入する権利を有しない。万一、国民党員が脱党し、他党に加入した場合、当人は国民党に復党する権利を有しない。9. 上記の条項を実行しない党員は党から除名されるか、或いは違反の程度に応じ、罰を受けねばならない。

争点を検討するために、総会は5人の国民党員と3人の共産党員から成る連席会議を創設した。顧問としてコミンテルン代表が招待された。かくて、蒋介石の圧力の結果、中国共産党は第二回大会以後、さらにはそれ以前に彼らが持っていた国民党内の極めて重要なポストのいくつかを放棄した。中国共産党の指導者の一人は総会の決議に党が同意した理由を次のようにボロジンに説明した：《もし我々がその時同意しなかった場合、我々には2つの方策が残されていた：1. 国民党から消極的ながら退却すること。これはあまりにも時期尚早である。2. 積極的に行動し、左派を引きつけ、蒋介石を排除すること。第2の方策はあまりにも危険である》。彼らの言い分がどうであっても、中国共産党広東支部は戦術的技量を発揮することができなかった。

1926年6月4日、陳独秀は蒋介石に公開状を送った。その目的は蒋介石との関係を回復するか、或いは少なくとも何とか繕うことであつた。しかし、その文書の書き方は極めて力強さに欠けており、そこにはある種の当惑、自己の勢力に対する極端な自信の無さが見られた。その手紙は大衆の間に権威を持つ党指導者の一人によって書かれたものには全く思えない。逆に、それには蒋介石に従属する姿勢が見られる。

手紙を出す口実となったのは、《黄埔軍校校長が党政政治委員の集会で行った。巡洋艦“中山号”に関する講演であつた》。この演説の際、蒋介石は言明した：《私だけが知っている多くの言い難い事柄が今でも私の心の中にある》。蒋介石はここで事柄を曖昧にした。そこで陳独秀はこれが共産党に不利益に解釈されるかもしれ

ないと恐れ、蒋介石に申し出た：《もしこの事が共産党に関係しているならば、細大もらさず全てを言って欲しい》。

蔣は黄埔軍校の政治部を指導している共産党員が彼の演説の中で、自分を段祺瑞に譬え次のように言っていると不満を述べた：《我々の組織内にも段祺瑞が存在している。そして北伐の前にこの段祺瑞を倒さねばならない》。陳独秀は蒋介石に、その共産党員が話したことを広東語から北京語に通訳する際の不正確さに全ては起因している、と若干無邪気にも説明した。

陳独秀は蒋介石が革命に本質的に忠誠であると賛美し始めた時、明らかに、コミュニストや大衆を誤まった方向へ導くことになった。陳独秀は書いた：《事実、黄埔軍校創設以来中山艦事件に至るまで、我々は蔣にいかなる反革命的傾向も見出すことはできない。蒋介石を打倒しようとするのは全くの反革命的である。もし中国共産党がそうした反革命党であるなら、蔣先生はそれを撃滅しなければならない》。勿論、当時、民族革命統一戦線を破壊することは間違っていた。しかし、何故陳は蒋介石の偽の革命性に対し、このような賛美を送る必要があったのか。

陳の言っていることは中国共産党が極端に弱体であり無力な存在でさえあるという考えを与えたにすぎなかった：《もしあなた（蒋介石）が当時（5月20日）広州にいなかったならば、孫文主義学会員が共産党員を文字通り大量殺戮することができたであろう……中国革命の勢力は未だ極めて弱体である。その反対に、我々の敵の勢力は実に強大である。我々の現在の革命活動は何処からも救助を期待できない嵐の時の、難破寸前の汽船に似ている。自分で舵を壊すことに何の意味があるのか》。

陳独秀は北伐に関して同志の何人かと意見が異っていること、また自分の考えを汪精衛と蒋介石宛に4回電報で述べ、その上詳細な手紙を送ったことを蒋介石に知らせることさえした。またしても、何故このような重要な問題に関する中国共産党内の議論を明るみに出し、党内に意見の対立があることを蒋介石に公開しなければならなかったのか。要するに、陳独秀の手紙は単に蒋介石の野心を引き出すことができたにすぎない、明らかに誤った文書であった。

《中山艦事件》の後、若干の当惑が国民革命軍内での活動にも見られた。当時、中国共産党員が事実上、軍隊内の全ての政治工作を指導していた。第1、第2、第3、第4及び第6軍の政治部長はコミュニストであり、

彼らこそ政治機関の活動家の大部分を占めていた。しかしながら、将校達はその相当数が最近まで軍閥軍にいたもので、コミュニスト達に対し明らかに不安な態度で接していた。そこで、第4軍では、コミュニストは第12師団にのみ受け入れられ、しかも、それはコミュニストが指導している第34連隊だけであった。これは北伐の戦いで有名を馳せた葉挺の英雄的連隊であった。当時その連隊には、約80名にのぼる中国共産党員がいた。ブリュヘルは可能な限りこの連隊を師団に編成したい旨、6月5日付の手紙で知らせた。

《中山艦事件》の後、第1軍ではコミュニスト達はほとんど全ての師団から追放され、黄埔軍校の政治コース及び将校連隊に集められた。黄埔軍校では国民党《左派》は《中山艦事件》、汪精衛の逃亡、そして5月の総会の後、すっかり途方にくれてしまった。

軍隊内に於ける中国共産党員の活動には、当時、重大な欠陥があった。彼らは国民党にほとんど注意を払わず、主として、自己の組織の成長にのみ気を配った。彼らは政治教育活動を実行する代りに、ブリュヘルが述べたように《政治委員として振舞い、結局、指揮官達の間で然るべき影響力を入手することができなかった》。

黄埔軍校の政治顧問Haymovが書いている：《コミュニスト達は軍隊内で極めて居心地の悪さを感じていた。彼らの間にも大きな見解の不一致が感じられる。蒋介石の要求に対する彼らの態度は様々である。共産党を出て国民党と共に活動しなければならないと思っている者もいる。また逆に、国民党から出て自由に活動することを提案している者もいる》。ブリュヘルは1926年6月5日の報告の中で指摘した：《この意見の不一致と彼らの置かれた情況の不安定さは黄埔軍校に於ける彼らの立場の安定性に影響を及ぼさざるを得なかった。黄埔で彼らは自己の陣営の著しい部分を失い始めている。そのことによって、かつて軍隊内で強力であった彼らの影響力が減少している》。

1926年7月14日になってようやく中国共産党中央委員会全体会議は共産党と国民党との関係に関する、詳細な決議を採択した。その中で次の事が指摘された。中山艦事件、5月15日の国民党中央執行委員会全体会議、そして1926年6月7日の、黄埔軍校のコミュニストに対する蒋介石の申し入れは、コミュニストに反対する国民党中道派の軍事グループによる一連の挑戦であった。これらの事は《我が党側のいくつかの誤り（実際の状況を考慮に入れなかったこと、大衆との結びつ

きが弱かったこと、独自の政治路線が欠けていたこと、香港ストライキを長引かせたこと)》から可能になった。

中国共産党は今や、国民党《左派》との協力にその注意を集中することにした。その決議の中で次のことが述べられた：《我々コミニストは国民党の指導部に参加して、実質的には、国民党“左派”が党建設に加わるのを妨げ、また、“左派”を擁護しつつ、“左派”が右派と闘うのを妨げるように活動している。我々は“左派”が政治的にも組織的にも自己決定するのを許さず、まさにそのことによって、革命的インテリ及び都市小ブルジョアジーによって国民党の発展を妨げている。そのために、この両者の間に、右派とある程度中間派がますます大きな影響を持ち始めている。

他方、我が党のより大きな自立性、右派に対するイデオロギー及び組織闘争に関する、昨年の総会の決議を実行しなかったので、我々は衆衆（労働組合、農民組合、学生）の中に充分な確固とした立場を築くことができず、華北の悪化した状況の下で、右派と中間派の軍事グループの攻撃に抵抗することができなかった。我々が知っているように、活動の方針は決議の中で極めて明確に決められていた。しかし、それは状況がすでに本質的に変化してしまった広州の事件の数カ月後によりやく為されたものであった。

総会の諸決議の中に国民党との合作の必要性が盛られていた。国民党から組織的に分裂することを主張した同志達の意見は、コミニストを国民党から除外するという右派の要求と一致しているという理由で、正しくないと批判された。《国民党の構成は、ブチブルジョアジーが優勢な役割を果たしていたので、我々は自分の政策に基づいてこの党の内部で、長期に渡って活動することができる》、これが中山艦事件の意義の評価であり、またその事件から得られた教訓の評価でもあった。だが、共産党が蒋介石の予期せぬ、裏切りの急襲に対して反撃を行った極めて困難な時期を経験した後、その教訓の意味が解った。

《中山艦事件》のすぐ後広州へ戻って来たボロジンがこの事件及びそれをめぐって展開していた闘争を、どのように評価したかをここで見てみよう。

ボロジンは《中山艦事件》が次の諸理由から起ったと考えていた。蒋介石の軍隊の骨格を成している中間派のブチブルインテリゲンチアは彼に圧力をかけ、コミニストを犠牲にして自分達の権利を拡大することを要求した。それに加えて、第2大会後《左派》の力

が強まったことが蔣を不安にさせた。さらに、中国のナポレオンになろうとしていた人物の個人的野心があった。ボロジンの見解では、《中山艦事件》の結果は蒋介石自身にとって予期しないものであった。この事件は軍が果している独得の役割の結果、国家的クーデターになった。続く事件は《左派》及びコミニストの弱さを表わした。そしてそれは結局、蒋介石の専制への道となった。

ボロジンはクーデター時の蒋介石の弱さについて指摘した。黄埔軍校の生徒の大部分が彼に反対だったので、彼は第2師団を用いてそれを包囲せざるを得なかった。汪精衛を指導者とする国民党《左派》は積極的に抵抗する条件を全て持っていたにも拘わらず、彼らは優柔不断で途方に暮れた。

ボロジンとブリュヘルが3月20日、中山艦事件の時広州にいなかったことはかなり重要な要素であった。もし彼らがそこにいたならば、国民党左派や権力を握ろうと必死になっていた蒋介石を支持しなかった軍部にも、恐らく彼らは影響を及ぼすことができたであろう。ボロジンが戻ってきた時はすでに遅かった——蒋介石は最も重要な支配的地位を獲得することに成功していた。たとえ、今將軍達が彼を制圧することができたとしても、勝利者達である彼らはきっと仲間同志でいがみ合いを始めるであろう。このことは呉佩孚が強力になりつつあることを考えると、極めて危険であった。そして蒋介石は戦術を変える必要性を素早く感じとった。

全ての民族——革命勢力の統一を維持する方針が当時、唯一の正しい路線であった。1925-1927の中国革命の経験を得て理論武装をしたボロジンはずっと後になって、当時行われた路線が議論の余地のないものであったことを確認した。1927年10月23日モスクワで、オールド・ボリシェビキを前にして中国での闘争について報告を行った際、ボロジンはその時まで発表された中山艦事件についての解釈を全て列挙した。それらは大体次のようなものであった：1) 国民革命軍幹部は国民党の監督から自由になろうとしている；2) 軍隊内に於ける中国共産党の影響力が増大して、その結果、それは蒋介石を倒そうとしている；3) ブルジョアジーは一連の行動（戴季陶の登用、孫文主義学会の創設、《中山艦事件》）によって、革命の支配権を求める闘争でプロレタリアートや農民に反撃をしている；4) 中間派戴季陶及び蒋介石は党内左派の連合隊を打ちこわそうとしている；5) 中国は自分の2人の

《偉大な息子》——汪精衛と蔣介石が並立する程大きくはない；6) ブルジョアジーは大眾運動の成長に抵抗している。何故なら、コミニスト達が国民党《左派》の登用の代りに、国民党内の指導的ポストを獲得し始めていたからである。(コミンテルン活動家 Войтинский と Рафес の見方)

蔣介石は起こったことを明瞭に説明することが全くできなかった、とボロジンは私に語った。彼は我々の側に移り、陰謀の存在を認めた、巡洋艦《中山》の政治委員のことを嫌気がさす程繰り返すばかりであった。

1926年5月15日、総会上で中国共産党が譲歩したことは実に正しかった、とボロジンは断言した。以前は、国民党指導部内のポストはコミニストが大眾運動を始めるために必要であった。しかし今や、この段階は過ぎ去った。中国共産党は蔣介石の決議に賛同したので、香港——広州ストライキを続ける可能性と農民組合組織を手に入れることができた。《中山艦事件》は労働者——農民運動を発展させる可能性に対して、決して悪影響を及ぼさなかったし、また巨大な権力を持っていたストライキ委員会に対しても、ほこ先を向けられることはなかった。

1927年10月になってもなおボロジンは、国民党中間派から分裂していたとしたら、それは大きな誤りであっただろう、と確信していた。《まず、広東省以外の巨大な労働者——農民大衆を揺すぶり、揺り起こし、休眠状態から呼び起こす必要があった》。もし共産党が譲歩しなかったならば、それは国民党との協力の終わりを意味したであろう。そして革命勢力は一つの省に止まったままになったであろう。《中山艦事件の関係者》は退場すべきである、とボロジンは強調した。今や、統一戦線内に《暗黙の謀議》が存在していた。蔣介石一派は北伐の助けを借りて、華北のブルジョアジーの支持を取り付けようとし、共産党はこの地域の労働運動の中に支持を見出そうと願った。

1926年6月の初め、広州の顧問団に対する特別報告で、ボロジンは統一戦線の枠内の区分を示した。彼の意見によると、国民党は5つのグループから成っていた：1) かつての国民党員である西山派で、彼らは今でも自分達を国民党と見做している；2) 右派、彼らは買弁ブルジョアジーと結びついている；3) 中間派、彼らを指導しているのは蔣介石の軍事派閥である（その派閥を支持していたのはプチブルインテリゲンチヤで、それは帝国主義に敵対的な勢力であり、また大眾運動

に賛成している——但し、それを自分の支配下に置くとはしているが——）ので協力して活動する必要がある、とボロジンは考えた；4) 小さなグループ、それは国民党内の比較的信頼できる左翼の何人かの代表（帝国主義に憎悪を抱き、実際問題に関して、大部分は共産党に従っているプチブルインテリゲンチヤ）、そして最後は 5) 中国共産党

私はすでに以前、《中山艦事件》後に統一戦線の左翼がとった立場について述べた。今回は、北伐前夜の右派の積極的な行為と蔣介石の二面性をもった行動について述べよう。

蔣介石は右派と左派に対して交互に打撃を与え、その間、益々大きな権力を手中に集めた。一見すると、彼のいくつかの行為は極めて急進的に見えた。彼は広東の政治闘争の舞台から数人の右派の指導者を追放した：広州警備司令であり第17師団長である呉鉄城が解任された。蔣は国民政府外交部政治委員伍朝樞と広東省政府外交部政治委員傅秉常を広州から追放した。伍朝樞の代りに、進歩的な左派国民党員 Eugene Chen (陳友仁) が任命された。特に悪名高い政治家胡漢民は広州を去らねばならなかった。《中山艦事件》で最も積極的な役割を果し、《中山艦》に居て組織的に挑発を行った欧陽格は逮捕された。それと同時に、蔣介石は1926年5月15日の中央執行委員会総会の後、国民党右翼の理論家戴季陶と結びついている人々を登用した。

蔣介石は自己のグループを組織的に編成するために精力を注いだ。彼は《黃埔同学会》を創立し、自分自身をその会長に任命した。その基盤となったのは第2師団の《孫文主義学会》員のグループであった。しかしながら、同学会の委員会には主として、コミニストと国民党《左派》が選ばれた。ボロジンとの会合で、蔣介石は新たな《第3の》政党を創立することさえ言い始めた。

私の見た所、蔣介石は非凡な俳優の芸を身につけていたけれども、ブリュヘルは当時、蔣介石の政治的策動を完全に見破っていた。彼は勝れた軍事専門家であると同時に、驚くべき政治感覚をあらゆる手の込んだ策略やデマの裏のひそむ事の本質を見分ける能力を持っていた。

1926年6月5日の報告の中でブリュヘルは述べた：《蔣介石と私との個人的な関係は最初、いささかきこなかった。もっとも、彼は私を迎えるために最上の砲艦を珠江デルタへ派遣してくれ、私はそれに乗り移り

広州へ到着したのであったが。彼はいつも我々が彼を信用しているかどうかという問いに戻った。そして何度もまた長々と、自分を5月20日の行動へと駆りたてた原因について語った。彼の語ったところによると、汪精衛とキサンカ（彼は直接キサンカのことは言わなかったが）は自分を無力にさせ、自分の軍隊の拡大を妨げ、それを他のものよりも悪い状態に置こうとしていた。また彼や彼の軍隊を軽視するというような政策は民族—革命運動の敵を強化する結果となり、それ故、彼は民族—革命運動を救うためにこの事を為さねばならなかった。

軍事及びその他の独裁権を手に入れた後、国民党内で孫文の占めていた地位に取って代わろうとする、言い換えると、党内で独裁権を得ることによって、自己の独裁権を強化しようとしているので、彼は《孫文主義学会》と闘争して泥沼に入り込むことを恐れている。コミニストと左派に関しては、彼は彼らをも恐れており、左派でさえも党に対する急襲や汪精衛の追放を許さないことに気付いている。彼はコミニストや左派が強力であること、また彼らと手を切ることは極めて危険であることをよく知っている。それ故、彼の政策は中途半端な性格を持っている。

蒋介石は自分の立場を強化するために、総会の後新たなポスト——中央執行委員会議長（中央執行委員会政治局議長と同等の職務）を導入し、それに自分の代理人の一人である邪悪な反動分子張静江を当てた。

根っからの国民党右翼は蒋介石の権力が増大することを明らかに恐れていた。このことはまた、《中山艦事件》に対して彼らが表明した不満に反映していた。事件後、右派（呉鉄城、伍朝樞、孫科、その他）はロシアの顧問達に宴会を催した。李福林さえもロガチェフを訪れたり、自分の顧問ルネフのために宴会を催したりして我々同志に初めて注意を向けた。当時、右派に属していなかったその他の將軍達は顧問達との連帯感を積極的に示した。例えば、李済深と鄧演達は事件に関して抱いた憤りを表わすためには、顧問達を訪問することが必要だと考えた。

《中山艦事件》に対し表面的には非難しても、それは右派が蒋介石と取り引きしたり、彼と親しくなろうとする妨げにはならなかった。しかし、4月24日、呉鉄城が解任された後一時的に関係が冷たくなった。右派は広州や広西の將軍達を説得し、軍隊内に支持を確保しようと努力した。

軍隊内に新たなグループ——《保定出身》が出現し

た。即ち、華北の保定にある有名な軍官学校をかつて卒業した將校達のグループ。そのグループに所属していた人の中で特に名を挙げると陳銘樞と白崇禧がいた。1926年3月、両者はもう一人の《保定出身者》である唐生智と了解をつけるために湖南省へ出向いた。唐は当時、この省の権力を手に入れようと活発に戦っていた。当時、蒋介石に対抗していたこのグループは我々顧問達に努めて近寄り、以前よりも大きな注意を中国共産党に向けるようになった。

右派は自分達の力を誇示するために、彼らの指導者胡漢民が広州へ戻って来るのを利用することに決めた。彼らはデモを組織して胡漢民を国民政府の首相に任命する要求を提唱させようとした。刊行物の中で胡漢民が声明していることや、国民党中央執行委員会政治局での彼の報告から判断して、彼が権力を握った場合、顧問達と共に活動する意志がないことは明らかであった。右派の中には、ボロジンが《中山艦事件》の制裁のために広州へやって来たことと耳打ちし、彼を逮捕するよう蒋介石をそそのかした者もいた。だが、5月8日、蒋介石は胡漢民に対してこれ見よがしに面会を拒否した。そこで翌日、胡漢民は香港に去り、そこから上海へ向かった。それでもなお右派は静まらなかった。彼らは商人や銀行家をけしかけて、胡漢民を政府首脳に任命することを要求するストライキに入らせようとした。また広東省でコミニズムの即時導入が目前に迫っているという噂を広めたり、等々のことを行なった。

この時期、再び《孫文主義学会》が活発になった。その指導者達は蒋介石の周りにまとわりついた。《学会》は形式上は解散したものと見做されていたが、それは見事にその活動を活発化した。《中山艦事件》後、政治工作が縮少していた黄埔で、孫文主義学会は政治部の機関誌——新聞及び雑誌を奪い、さらに政治部そのものを攻撃しようとした。それは国民革命軍第1、第2、第14、第20師団及び黄埔軍校内で最大の影響力を持っていた。

《孫文主義学会》が与えた腐敗の影響の結果、蒋介石の軍隊の士気が著しく低下した。またもや、窃盗、大酒飲み、賭博、売春が始まった。軍と広東省住民との関係は紛糾し、農民との結びつきは弱まった。汕頭——潮州地区で、商業関係者さえも軍に対し嫌悪と敵意を抱くようになった。何人かの師団長は賭博場を開く許可を与えるよう、大巨孫科にしつこく迫った。彼らはそれによって悪くない儲けを得ようと考えていた。

蒋介石は自分の軍隊内の状態が危険であることを自

覚しており、この点についてしばしば顧問団長に愚痴をこぼした、とブリュヘルは述べた。

しかし、学生や婦人団体の中でさえ成功を収め始めた《孫文主義学会》の強化された活動は明らかに、蒋介石の支持なしということは有り得なかった。呉鉄城の追放や伍朝樞の離脱に関連して、ブリュヘルが次のように述べたのは洞察力のある言葉であった：《これは孫文主義学会に対し敵対的態度をとっていた個人に対する攻撃ではなかろうか》。一方、すでに言及した1926年6月5日の報告の中で彼は推測して言っている：《蒋介石は今まで彼自身にとって危険な、孫文主義学会の中の武装集団に対して打撃を与えなかった。この事は孫文主義学会を当てにし、その支持ですでに彼が実現していた独裁権を強固なものにしようとする蒋介石自身の政策を実行するための決定であろうか、それとも、この事は恐怖に由るものか、或いは自分のために一時的に学会を利用しようとしたものなのか。私の意見では、その時彼にそのような行動をとらせたのは最後の二者のうち一つか、或いは両者であって、決して最初のものではない》。ブリュヘルのこの結論は、コミュニストと国民党《左派》が学会内で自分達の影響力を強化せねばならなかったことを、再度示していた。右派との闘争は北伐に備えて国民革命軍が政治面での準備を行う上で、重要なきっかけになった。

できるだけ早く北伐を始めるという考えが当時、殆んど全ての指揮官達を捉えた。当然のことながら、將軍達は色々な思わくによって動かされていた。蒋介石は軍事行動によって内部対立や相互の争いから將軍達の注意をそらし、更に強大な権力を一手に収めることができると考えていた。湖南省の將軍達は唐生智が独自に呉佩孚の支持者達をうまくさばき、この省の支配者になることを恐れていた。李濟深は広東の諸部隊を指揮していたが、国民革命軍が北方へ出征し、一方自分は広州に残って広東省を手中に収めることを期待していた、等が挙げられた。

北伐という考えは孫文の遺言であることもまた考慮しなければならない。兵士達は広東が軍閥から解放された後、北方へ出征し、中国解放を求める闘争の新しい段階に入るという考えを教え込まれていた。広州政府予算の5/6を消費している10万の軍隊が広東に存在することを正当化できるのは、来るべき北伐のみであった。ソ連の顧問達も広州を全中国の革命運動と結びつけるであろう北伐という考えを、熱烈に支持した。1926年の初め、馮玉祥国民軍の要請に答えて、国民革

命軍が即時出撃することが企図された時さえもあった。無論、そのための準備は未だ完成とはほど遠いものであった。

モスクワでは情報が不足していたので、国民革命軍司令部が直ちに北伐を実施しようとしていることが全く解らなかった。カラハンは北伐を直ちに実行することに反対であった。1926年6月12日の報告書の中で彼は書いた：《私が恐れているのは、唐生智への援助に関連して広東省で起っている騒ぎが北伐のスローガンを掲げて広がっていることである。また広州政府や国民党中央執行委員会がこれを壊すことは極めて困難であろうと心配している》。

1926年4月末、華南に戻って来たボロジンの立場も同じようであった。彼は中国共産党中央委員会南方局の会議に招かれ、そこで北伐の即時実施に反対の発言をした。ボロジンは次のことを勧めた。まず国民党内に安定した内部情況をつくること、良好な政治的情況をつくること、馮玉祥の国民軍と協定を結ぶこと、孫伝芳と話しをつけるよう試みること、或いは少なくとも孫伝芳の中立を確保すること、農民の間でアジテーションを実行すること。軍にソ連の武器を完全に装備することもまた必要であった。

中国共産党の指導者達は誰もボロジンの考えに反対しなかった。ボロジンは明らかに、北伐の考えを熱烈に支持していたが、先ず、十分に準備を整える必要があると考えた。このことについて触れた1927年10月の報告の中でボロジンは述べた：《広東省では問題は以下のものであった：揚子江へ向けて成功裏に出撃し、極めて広汎に大衆を立ち上らせ、下から中山艦事件グループを根絶するか、それとも、広東に留まって、そこで英国帝国主義や国内の反革命の抑圧の下で喘いでいるか、そのいずれかである》。

北伐がごく間近かに迫ったことが明らかになった正にその時、ボロジンは上海を直ちに攻撃することには絶対に反対である、と発言した。私にはまだ、政治情況を十分に理解する余裕がなかった。そこでボロジンに尋ねた：《どうして上海へ行ってはならないのか》ボロジンは彼特有の慎重さを持って答えた：《革命勢力が三つの基本的な敵対勢力に打ち勝つことができた時のみ、それは上海へ進むことができるであろう。この三者とは帝国主義、軍閥、そしてどんな民族——革命運動にも再三に渡って裏切りを見せたブルジョアジーである。さもなければ、次の二つのうちのいずれかになるに違いない：革命勢力は、まさにこの三つの

反革命勢力と闘争に入った太平天国の乱と同様に崩壊するであろう。或いは、それを構成していた小党派に分解するであろう。中山艦事件グループという名称ですでに有名になっている、革命勢力の一部は1916年に国民党が経験したと同じように必ずなるであろう。即ち、一方で自分達の起こした事件に対し表面的には反省しているように見せかけ、他方では、帝国主義に対し公然の或いは秘密の義務を負い、プロレタリアートと革命をそれに引き渡すであろう》。

ボロジンは先ず北京をとりその後すぐに上海を占拠すべきだと考えた。かくてボロジンは北伐を革命の一部であり、広大な地域に革命を広げることであると考えた。彼は然るべき政治的準備なしに性急に軍事行動に入ることから生ずる危険を明白に見てとっていた。そして国民革命軍の成功を、右派が自分達の目的のために利用する可能性を感じていた。ボロジンは革命に好都合な、北伐の結果が確実に得られるよう極めて真

剣に闘うべく、国民党《左派》とコミュニストを動員しようとした。

香港——広州ストライキに対するボロジンの態度は正にこの考えに基づいていた。1927年10月、ボロジンは自分の見方を次のように明確に述べた：《揚子江へ到達し、そこでプロレタリアートと連絡を取り合い、英国帝国主義に反対する広東の闘争に勝利するまで、香港——広東ストライキを持続する必要があるという意見を私は個人的に持っていた》。ボロジンは革命の中でのプロレタリアートの役割と、民族——解放闘争の中でプロレタリアートの行動の持つ決定的な意味を充分に理解していた。

良く知られているように、北伐が成功するに必要な前提条件が確保されていなかった、1926年6月にそれが始まったというのが具体的な状況であった。ボロジンが立てた行動計画は実行されなかった。